神奈川県協会大会兼関東インカレ個人戦

県協会と地区学連の初の共催イベント

佐々木　順・佐藤　信彦

さる 12 月 3 日、神奈川県協会としてははじめての主催大会が、6 年前の東日本大会テレイン「大雄の鉄人（南足柄市）」にてわれた。6 年前の悪天候とは打って変わった晴天のもと、約 500 名の参加者を集めた。

大会開催の経緯

神奈川県協会は昨年度に中・長期計画策定委員会を組織し、財政問題、テレインコントロール、事業企画などの課題を討議してきた。経済界を襲った不景気は、オリエンテーリング人口の減少と合わせて、協会を蝕みつつあった。その中で出てきたのが、94 年の東日本大会で作成したまま眠っていた「大雄の鉄人」の活用であった。ここは多少急峻ではあるが、古くは国際二日間大会、今はもうなくなってしまった朝日大会など、ビッグ大会が何度も開催された、由緒正しいテレインである。しかし、地図を作ってかれこれ 5 年、残った白図がおよそ１５００枚・・・。大会でも開くか？といっても、参加者は来るアテは？赤字になったら、どーするの？

この懸念への答えが、関東インカレの誘致であった。「毎年テレイン選定に苦労しているんです...」そんな言葉が関係者の頭の中に残っていたのである。関東インカレを一緒にできれば、参加者は選手権・一般合わせて 200 から 300 名は約束される。９９年１１月、慌てて、まだ委員会の答申をまとめるはるか前に関東学連関係者とコンタクトした。なんとか彼らのテレイン選定に間に合った。しかし、協会が目指す大会は決して関東インカレを下請けすることではない。多くのオリエンティア、市民に満足してもらえる大会である。3 月までの間が、インカレとしての要求仕様、例えばゴールした選手とスタート前の選手が接触しないようにすることで公平性を高めるなど、と、一般オリエンティアのレースとを整合させられるかどうかを検証する期間であった。

これをクリアできたことで、ようやく準備委員会の発足となった。準備委員会には二十歳台から三十歳台前半の意気盛んなメンバーが参加して、大会の趣旨を生かす形態を熱心に議論した。その結果、コンパクトな大会では、年齢別のクラスに拘るよりも距離と難易度の選択肢を増やす方がいい、という結論となり、カラーで示す７つのコースを設定することとなった。多くの人は、この大会で 1 番になるために来るわけじゃなくて、オリエンテーリングしたいからくるんだよ、という発想である。ビッグ大会とは差別化したのだ。また、選手権クラスを走りたい人のためのチャレンジクラスのアイデアもここで生まれている。これは、学生ＯＢ・ＯＧが学生諸君と比較する場となった。「まだまだ、学生には負けないゾ」と威張ったり、「もう敵わない」とか。

これ以後、夏を過ぎると準備が本格化するが、上に述べたような若手メンバーの熱心な活躍により、大会準備は各地の大会でも会場申し込みも含め、順調に進むこととなった。皆、後輩相手ということで熱が入っていたようだ。事前申し込みは個人が選手権合わせてのべ４８９名。学生・一般の比率は 1 対１ぐらい。昨今の大会参加者数、既成地図であることを考えれば、いい数字ではないだろうか。

反省点としては、若手とベテラン、あるいは、電子メールを使える人とそうでない人の情報の共有化。多分にベテラン勢の辛抱に支えられているように思う。感謝である。

さて、当日は？

会場は、ふれあいの村という県傘下の財団の管理する施設であった。コテージに宿泊できる形態のため、安価に泊まってもらえるため、特に学生の参加者には良かったのではないだろうか。前日の食堂では一同に会した 200 名強の宿泊者を前にして、筆者も久々に身の引き締まる思いがした。

夜が明けると晴天。当日参加者の出足も好調にいよいよ大会が始まった。

また、市民向けのグループクラスは、スコア形式とした。これは多くの意見があろうが、初心者に楽しんでもらうことを念頭においてのことであり、楽しんでもらえたようであるが、参加者増の方法にはまだ検討課題が多いように思う。

今後、少子化の影響（学生人口はあと 10 年で 4 割ぐらい減る）もあいまってオリエンテーリング人口の増加には困難が待ち構えている。既成地図の有効活用による近郊テレインでの気軽な大会の開催や学連行事等との共催は、人口増のみならず高品質地図の供給と各団体の財政的問題の両立という面でも有効な選択肢となりうるのではなかろうか。

■■大会ミニミニ参加記■■

森岡裕起

Western Cup(12 月 3 日)

於：岡山・蒜山高原

関西の最強クラブを決めるこの大会、今回特筆すべきは、リレーのタッチゾーンが、「ドーム」の中、インドアでおこなわれたことである。当日は、小雨がぱらつくあいにくの天気であったが、ドームのおかげで救われたのではないだろうか。

また、地元の特産物や、温かいトン汁なども販売されていて、地域との交流ができていることもうかがえた。

速報も SI システムで、各自のラップタイムを見ながらのレース反省は盛り上がった。

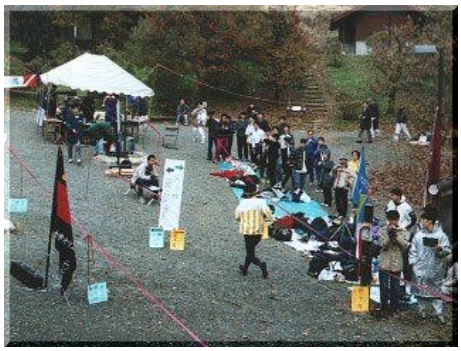
オリエンテーリング 神奈川県協会大会

県協会初の大会は関東学連との共催！　男子は紺野（早稲田）女子は上松（筑波）が制す

佐々木　順（サン・スーシ）

晴天の下，500名が初冬の足柄を走る

さる12月3日，神奈川県協会としては初めての主催大会が行われた．舞台は６年前の東日本大会にて使用された「大雄の鉄人」．晴天の下，学生選手権・一般クラス・市民クラス（スコアO）合わせてのべ500名の参加を集めた．今回の大会の最大の特徴は，関東学生オリエンテーリング連盟との共催イベントとして行われたことである．本大会の選手権クラスには，予備選考を経た学生たち（男子83名，女子55名が参加した．今回の選手権クラスでは電子パンチが使用されたこともあり，ゴールして即座に変化する速報ボードに，選手やコーチ陣，応援者が一喜一憂する光景が見られた．



▲クラブ仲間が陣取るゴールへ選手が飛び込む

植生の変化に混乱？優勝設定狂う

今大会の試走には秋の大会シーズンが使われた．傾斜がきつい上に植生は悪化．さらに６年前の地図ということで，昨今の技術と比較すると見劣りする地図表現にコース設定は難航．大会直前に発表されたコース距離と優勝設定時間（男子で6.8km，設定70分）は，キロタイムが10分を越えるものとして参加者にそれなりの覚悟を求めたはずだった．

ところが当日，秋の深まりにつれて林の見通しは予想を越えて良くなっていた．男子のトップゴールでいきなり70分が出て，プランナーの山本英勝氏をあわてさせた．続々と記録は破られ，優勝候補筆頭と見られていた紺野俊介（早稲田）は，ひとりだけ60分を切るタイムでゴールし，そのまま逃げ切り優勝．女子は逆になかなか優勝設定時間（55分）に達する選手が現れなかったが，終盤になって上松佐知子（筑波）が54分という時間で帰還，山本氏は安堵の表情を浮かべた．

チャレンジクラスで露見したレベル差

今回の目玉として，選手権クラスの出場者の全員出走後にコースを開放する試みを行った．男子コースでは鹿島田浩二（渋谷で走る会）の50分をはじめ4人が，女子コースでは中村正子（京葉ＯＬクラブ）の44分をはじめ9人が，学生の優勝タイムを上回った．期せずして，現在の学生とトップレベルの差が見えたレースになってしまったようだ．

▲表彰を受ける女子優勝の上松（左から２人目）

上位成績（選手権クラス）

[ME]　6.8km/350m，出走83名

1　紺野 俊介　0:57'21"　早稲田大学 4
2　増田 佑輔　1:02'23"　筑波大学 3
3　安井 真人　1:04'50"　早稲田大学 4
4　小泉 成行　1:05'05"　筑波大学 3
5　西村 秀生　1:05'16"　早稲田大学 4
6　加藤 弘之　1:06'47"　東京大学 3

[WE]　4.2km/190m，出走55名

1　上松 佐知子　0:54'44"　筑波大学 4
2　山田 陽子　1:01'18"　図書館情報大 4
3　二俣 みな子　1:04'40"　筑波大学 3
4　加藤 貴子　1:05'01"　筑波大学 4
5　井手 千寛　1:05'09"　相模女子大 2
6　大島 由起子　1:05'24"　東京女子大 4

[ME-C]　6.8km/350m，出走45名

1　鹿島田 浩二　0:50'41"　渋谷で走る会
2　村越 真　0:54'39"　静岡ＯＬＣ
3　高橋 善徳　0:55'31"　筑波山を登る会

[WE-C]　4.2km/190m，出走15名

1　宮川 達哉　0:38'03"　所沢ＯＬＣ
2　中村 正子　0:44'04"　京葉OLクラブ
3　金子 恵美　0:45'06"　上尾ＯＬＣ

■■大会ミニミニ参加記■■

森岡裕起

大阪OLC 25周年記念大会

(12月24日)

於：大阪・箕面

会場入り口には、大きなクリスマスツリーが！　クリスマス・イブに行われた大会の、粋な計らいだ。

大阪からのアクセスがよく、遠方からもたくさんの参加者が集まった。また、北信越、関西学連のインカレ・セレクションレースに指定されていて、学生たちも気合の入ったレースだ。体育館の壁には、ここ数年のインカレの写真も掲示されていて、場を盛り上げていた。

テレインは、「予想通り」厳しく関西風味たっぷりであったが、心地よい疲れに参加者は満足しているようであった。

会場には、これまでの大阪OLC が開いた記念大会についても掲示されていて、OL の移り変わりとともに成長してきたクラブの底力を垣間見ることもできた。